



坂名垣魯文作「日光道中漆栗毛」(名古屋市蓬左文庫所蔵)より



昼食の給仕をする若い娘



刺青をした人足(本文131頁)



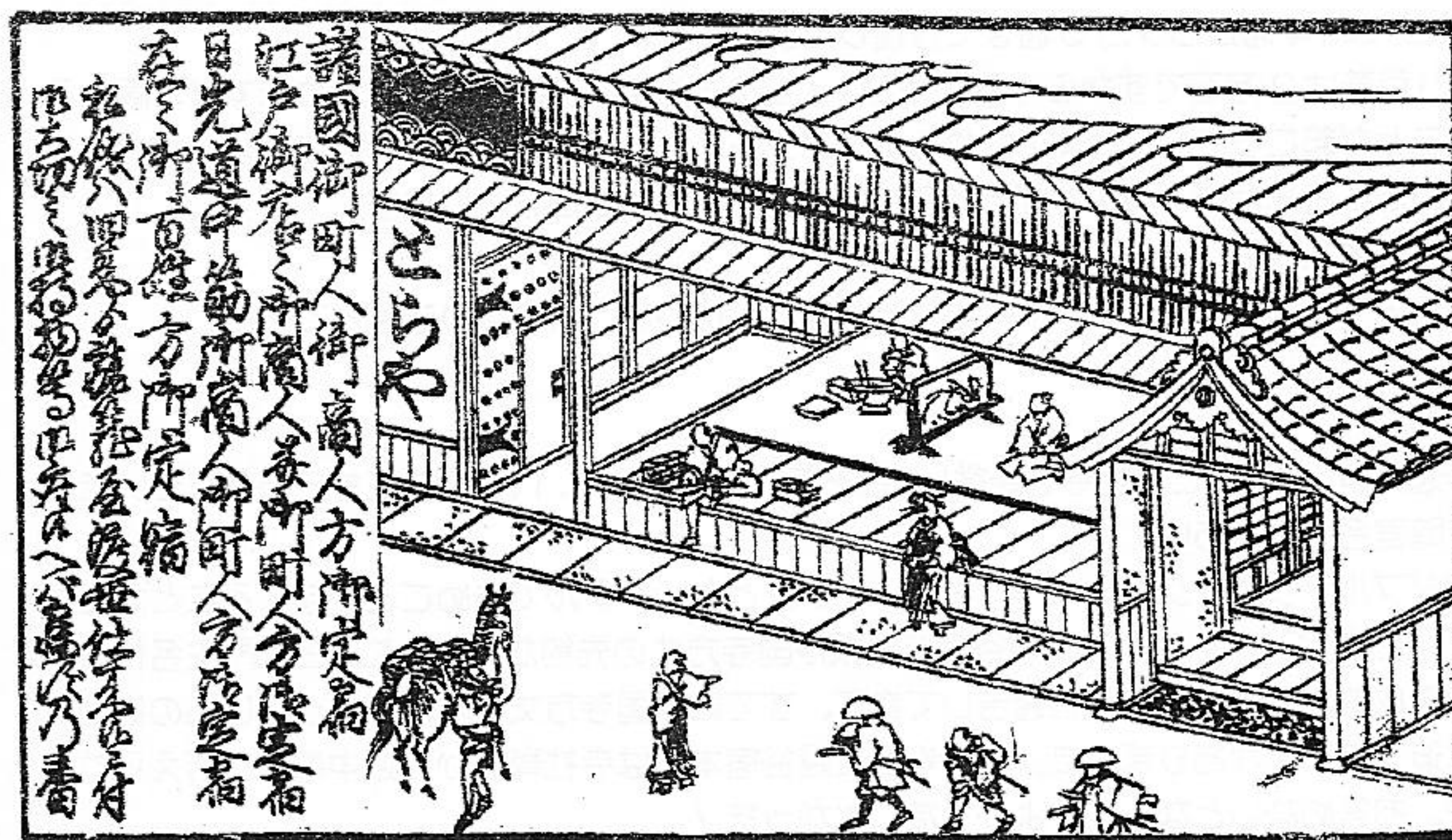
ジャムつきのパンを見つめる女



江戸時代の日光道中のようなすが記録として残っているものは、なかなかありませんが、上図と下図は、当時の旅行ガイドブックともいえるべき「諸国道中商人鑑」(竹野半兵衛・壺井円水撰 花屋久二郎刊 文政10(1828)年 国立国会図書館蔵)に出てくる、当時の越ヶ谷宿を描いた貴重なものです。



上図は、日光道中・越ヶ谷宿の入口にあった「中屋」さんです。「みみの薬」とありますが、「二八御めし、めんろい」「御料理」「御茶漬」などともあって、薬屋さんと食堂をかねたものだったのでしょうか。その場所は、大相模不動尊へ行く不動道との追分でもありました。



この図は大沢にあった「とらや」さんという旅籠です。この日光道中は十返舎一九描くところの弥次さん、北八さん、日光参詣の朝鮮通信使の一行、伊能忠敬、渡辺崋山、そしてもちろん、お成り道ができるまでの徳川将軍家や参勤交代の北国の大名などが通っていった道なのです。





新宿

大物

大枝

上乃久里

下乃久里

大里

大枝

大房

越谷  
草加

二里

不残代官地  
以村ノ野場ノ  
道有

越谷

町中ノ式  
本原

權左門

大澤

同久里

茶屋

秋田屋

七郎駕立

御駕立

観名物

二里

草加  
同久里



千住ヨリ  
草加

二里

何原曾根

登リ戸

蒲生

以村燒米午更名物  
此邊御存出場ナリ

金左門新田

九左門新田

草加  
千住

同吉甚原

瀬崎

以同宮權現之社ナリ  
右、王子ノ道ナリ

水神 茶屋喜三郎前  
御駕立

以村生石田中、水神池ナリ

保喜間

以村ノ塚村中茶屋立地ニ  
右、方岩規ノ道ナリ

六存村 日天子出用坊ナリ

鳴根

以同佐竹ノ道ナリ

梅田

新谷 千住谷 草加

町中ノ式  
本原

清水休藏

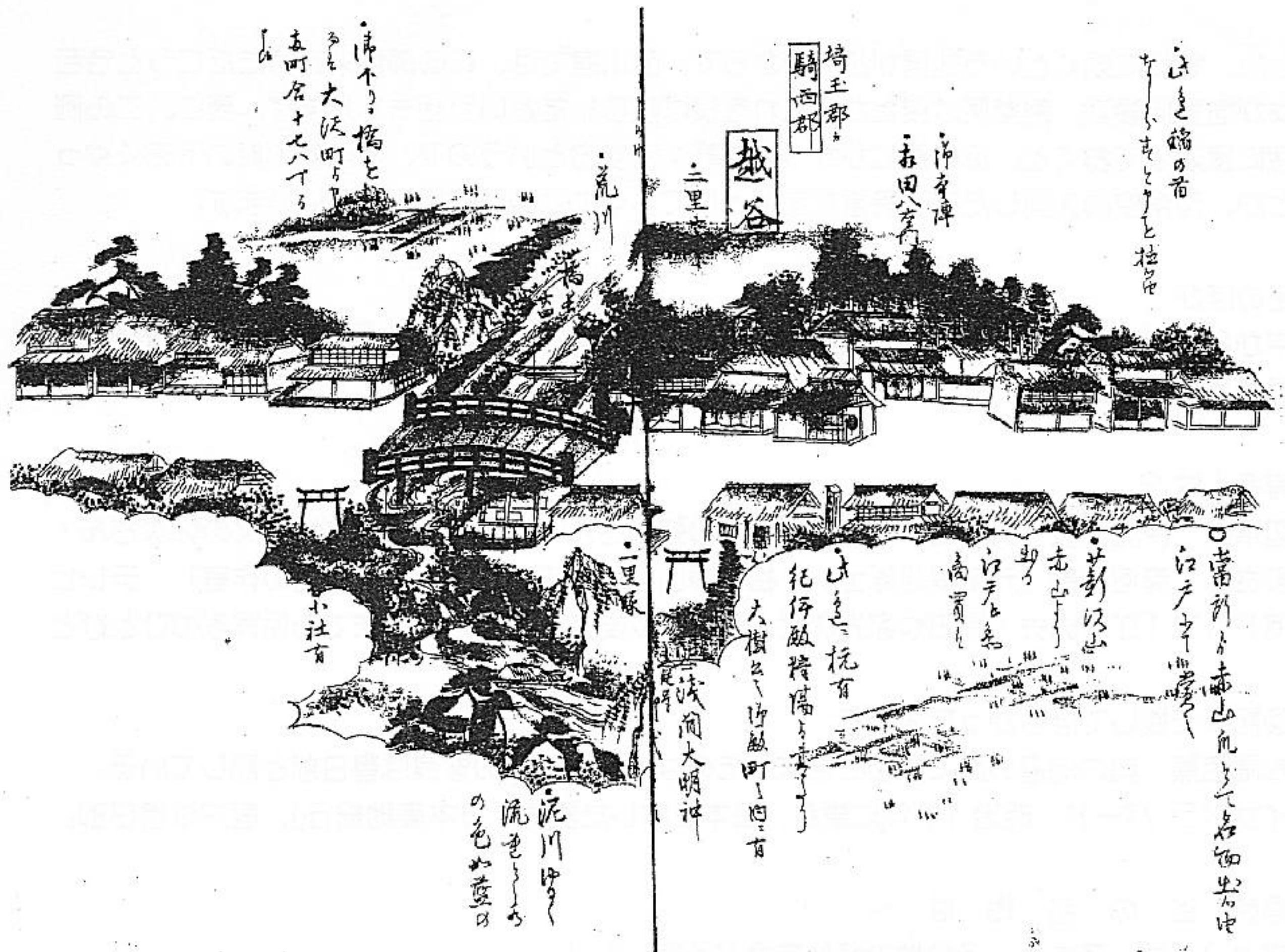
草加ヨリ

千住

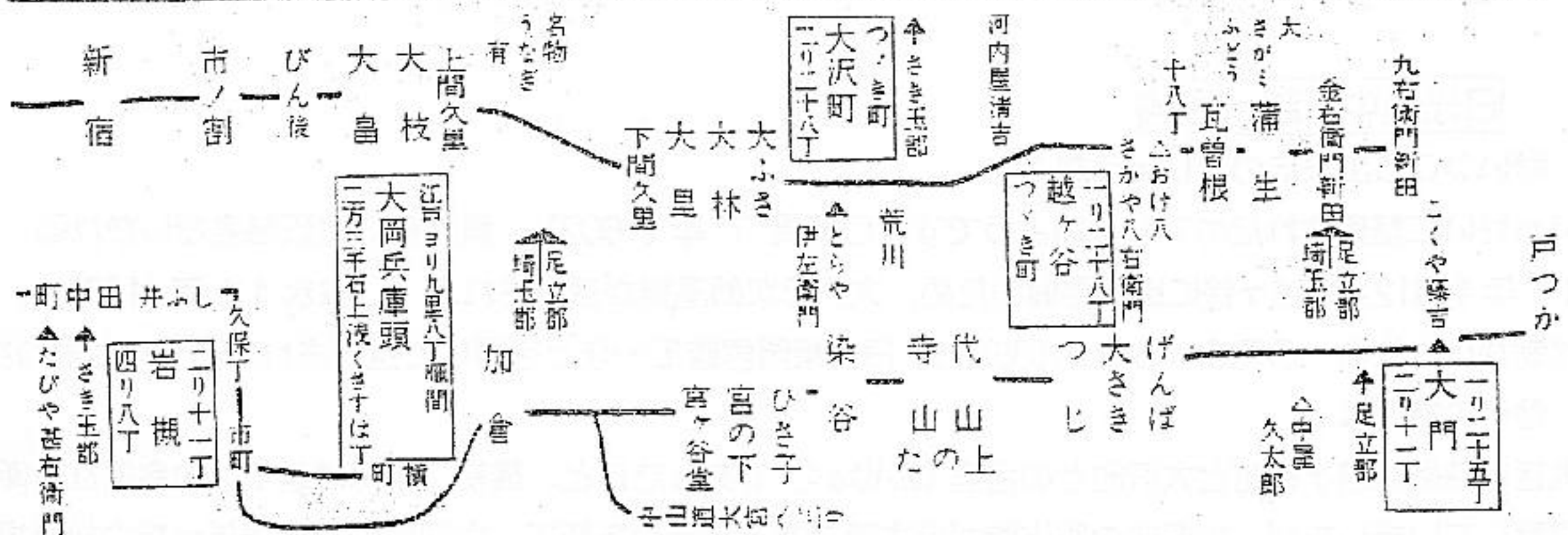
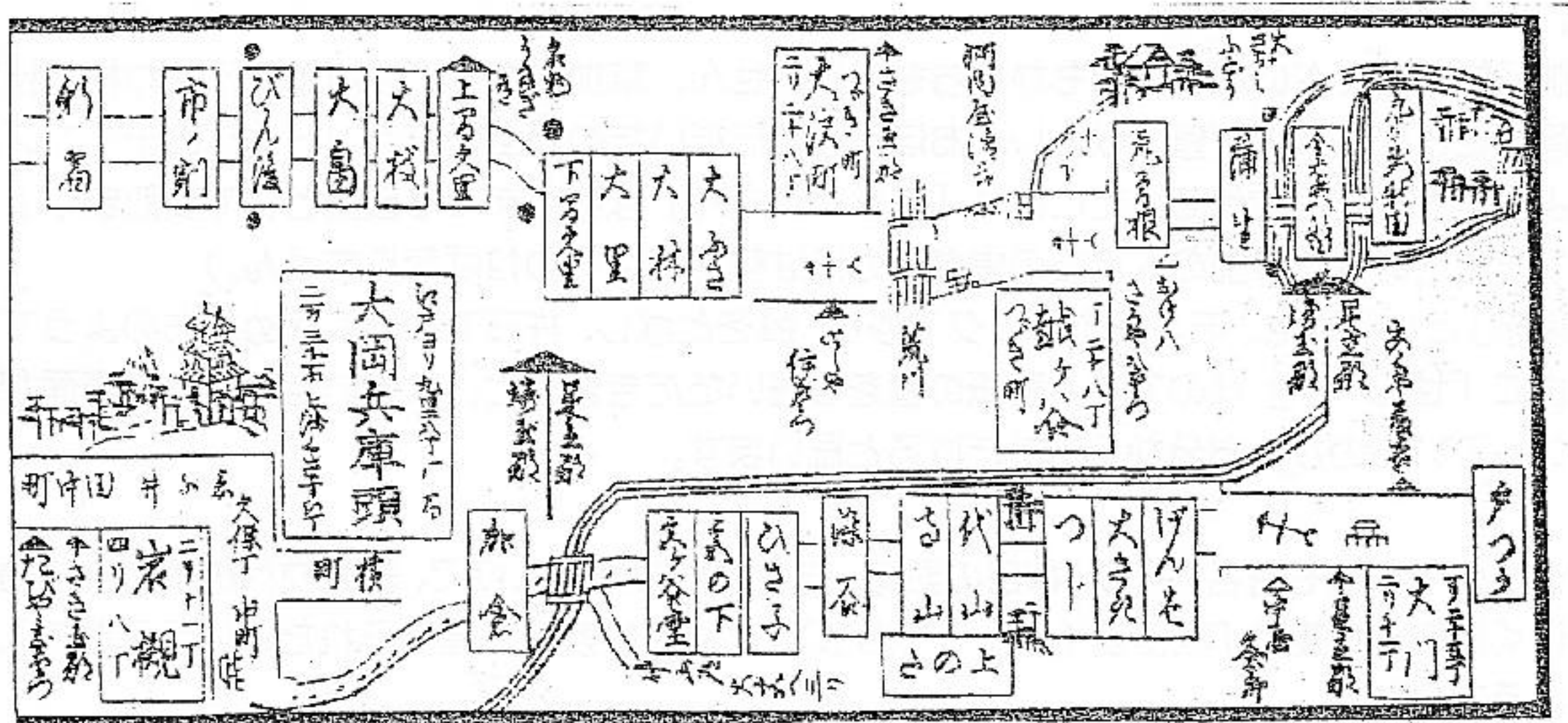
二里

「越後新発田より会津を経て江戸へ至る道中絵図」 遠藤奉慶作 (幸手市史資料編Ⅱ・付録) より





☆武奥増補行程記 清水秋全作 寛延4 (1751) 国立国会図書館蔵



☆五街道中細見記 (奥州道) 須原屋茂兵衛他発行 安政5 (1858) ~日本街道総覧 宇野脩平編・新人物往来社刊より~



## 日光街道を歩いた人たち

### ◎日光街道について

#### ○本当は「日光道中」

正徳6年(1716)幕府によって五街道の呼称の統一がはかられ、正式に「日光道中」となりました。日本橋を発し、千住～鉢石の20宿が通称日光道中、白沢～白河の10宿を奥州道中と称します。<三厩宿(青森県)までも奥州道中とよぶこともあるが、正式ではない>距離は142.8Km, 38里。将軍のご社参は4日かけて、一般人もそれぐらいかけて行きました。当時の人は一日、十里(40Km)を歩くのが標準でした。

### ◎どのような人たちが?

#### ○参勤交代の大名たち

最初は2年に1回、自分の領地へ帰らねばならない参勤交代制度によって、仙台・伊達氏、秋田・佐竹氏、会津・松平氏など、東北の大名41家ほどが、日光街道を通りました。

どこの宿でいくら払ったか、行列の人員などを書き記したマニュアルとか、大名が景色を楽しむための、今で言うイラストマップもありました。

#### ☆逃げまどう大名行列

八戸藩・南部家の御入部御道中帳(寛政9年1797)と御参勤御道中一件帳(文政9年1826)には「日光宮様<門主>ご旅行の砌(みぎり)、お出先へ行きかかったときは早速、物陰へ相控えご通行以後、まかり通るべきこと。物陰がないところは往来より引き離れてまかり通り、下座いたすべきこと」とあります。あの長い大名行列が「物陰」へ隠れるのは大変だったことでしょう。どのように隠れたのでしょうか?

大名行列は1万石の大名で50~100人、10万石以上で230人、20万石以上では385~450人位で朝4時から夕方6時まで行進したようです。

当時、八戸藩は2万石ですから100~200人位の人数の行列だったと思われませんが、隠れるようなことが起こったら、団体の隠れん坊はホントにホントに、大変だったでしょうね。

また、いかに日光宮様<門主>がおそろしい存在であったかが分かります。

#### ☆庶民と大名行列

庶民は女・子どもは軒下でよいが、男は家の中で平伏しなければなりませんでした。

### ○日光門主

最強の通行者。東照宮と寛永寺を兼掌し、輪王寺の宮と称され、代々法親王が任命されていた。

#### ☆本陣差合(さしあい)

いまもダブルブッキングとかオーバーブッキングとか、ホテルでもめごとが起こることがありますが、文政13年(1830)、越谷宿に岩槻浄国寺方丈の先約があるのに、日光門主名代の江戸谷中覚成院方丈が本陣利用を通告してきて、すでに浄国寺方丈は本陣へ入っているのに明け渡せと迫ったことがありました。お断りした越谷宿本陣は寺社奉行から道中奉行へ訴えられましたが、お咎めなしとなって、よかった、よかった!

### ○朝鮮通信使 琉球慶賀使

江戸を訪問した、朝鮮通信使(寛永13年(1636)から3回)、琉球慶賀使(正保元年(1644)から3回)の人たちが幕府により、無理やり?日光を訪問させられることもありました。朝鮮



通信使の方は、越谷を通った日記もちゃんと残してくれています。

どんな行列だったのか、見たことのない異国情緒たっぷりで、沿道の人たちに喜ばれたことでしょう。

#### ○日光参詣の人たち 学者、文人、墨客なども～

朱子学の総本家・林羅山、二代目・林鷲峯などや、浮世草子の作者、戯作者なども日光見物に出かけ、紀行文を書いています。庶民もちろん、日光社参に旅立ち、記録を残している人もいます。

#### ○蝦夷地調査の人たち

寛政のころ（1800年代）から、幕府の蝦夷地への関心が深まり、遠山金四郎の父・遠山景晋、画家・谷文晁の弟・谷文旦などが調査へ出かけ、越谷を通った記録を日記に残しています。

#### ○伊勢参りに出かけた人たち

二戸（青森県）の人、庄内や鶴岡（山形県）の人、会津の木地屋さん、野州久我（栃木県）の人など、遠路を伊勢参りに出かけた人たちも日光街道を通っています。

#### ○女の人も旅をした

天保12年（1841）、筑前国鞍手郡底井野の商家・「小松屋」の主婦・小田宅子が友人の桑原久子がほかに女友達二人、従者三人の計七人で約五ヶ月、八百里の旅（奈良・伊勢・善光寺・妙義・榛名・日光・江戸・京都・大阪から自宅）をしたときの日記が残されています。

息子・嫁と江戸から蝦夷地まで行った女性、松前から故郷の京都へ、もちろん歩いて帰ったヒトもいます。

#### ○ギメとレガメ

パリにあって東洋系の逸品を数多く展示しているギメ美術館（今は国立）を、自分の収集品を主にしてつくった実業家・エミール・ギメは明治9年（1876）に友人の画家・レガメと共に日光遊覧をしています。上野から人力車に乗り、昼食を食べたのは越谷の「うどんや」さんでした。そこで、高下駄をはいた若い給仕さん、刺青をした人足さんなどをスケッチしたり、文章に残したりしています。生まれて初めて、パンとジャムを見て感動し、ジャムを塗ったパンをあげたが、すぐには口に入れられなかった女中さんは、日光の帰りに寄って聞いてみたら、食べてくれていたので喜んだと書いています。

#### ○日光例幣使

家康死後30年たった正保3年（1646）、東照権現が東照宮となって臨時の奉幣使がおくられ、翌年から慶応3年（1867）まで221年間、毎年、天皇の名代として通常、参議に列せられる公家が日光に金幣を捧呈しに出かけました。50～60人くらいの規模で3月末から4月1日に京都を出発し、中山道、倉賀野からは例幣使街道を通過して日光へ行きました。

そして、帰路は日光街道を通り、江戸で将軍家に挨拶をして帰りました。

#### ☆大変な人たち 日光例幣使

天皇が正月三が日の間、神前に供えた御膳飯を乾飯（ほししい）にし、五、六粒を菊の紋章を押し紙に包み、御供米として、休憩・宿泊の代として下し、宿代はいくらも払わなかったようです。この包みを八万個も携行した例幣使もいたといわれています。この御供米は庶民の羨望の的



でした。病気に効くという迷信があったからで、品川宿では、この御供米をいただくとうと老若男女が宿舎に殺到、例幣使は楼上からこれを投げ散らしたという話もあります。更に、この例幣使に接近しておくこと、流行病にかかっても軽くてすむというので、例幣使の輿の下をくぐったとか、例幣使の入湯した湯を貴重な薬湯として多くのものが飲用したといひます。

#### ○その他

江戸から七戸（青森）へ借金取りに出かけた人、よき相手を求めて諸国剣術修行の佐賀藩士なども通りました。

#### ○有名人は？

渡辺崋山 伊能忠敬 貝原益軒 十辺舎一九の弥次さん・喜多さん 仮名垣魯文の弥次さん・喜多さん 清河八郎（元新撰組隊士） 松浦静山（肥前平戸藩主で甲子夜話の作者） テレビ大河ドラマ「江」の夫・秀忠や家光など、日光御成街道が整備されるまでの將軍家のひとびと

#### ◎記録を残してほしかった人たち

○松尾芭蕉 奥の細道の旅で最初に泊まったのは草加。弟子の曾良は春日部と記している。

○イザベラ バード 明治11年に単身、日本を旅した記録「日本奥地紀行」、宿泊は春日部。

#### ◎越谷の名物は～

○旅といえば、その地、その地の名物を食べる楽しみ！

越谷の名物は、別紙にまとめましたように、焼米とうなぎが様々な書物で取り上げられています。

草加名物のせんべいなど、影もかたちもありません。草加せんべいは川越で行なわれた特別大演習のときに、大正天皇に献上し、おほめをいただいたのが全国ブランド化へのチャンスだったようです。江戸時代にいたという「おせん婆さん」はあくまでも伝説として受取ましょう。

（でも、その後の草加の人たちの営業努力には敬意をはらわねばなりません。）

「焼米」というのは、モミをホウロクで炒り、殻をとばし、杵臼でついて固めたものようです。まさに「せんべい」なのです。表紙の画をご覧くださいますと、大きいせんべいの表面がデコボコしているのが、お分かりいただけると思います。

マクリのうなぎも有名。特に、秋田の殿様・佐竹侯がお気に入り、参勤交代の折に立ち寄り、あげくは自分専用の「秋田蘆（しゅうでんろ）」という座敷まで建てられたというほどの入れ込みようでした。

### 日光道中・越ヶ谷宿

#### ◎いつごろ出来たのでしょうか？

いっせいに整備されたのではないようです。○慶長7年（1602）、奥州道に宿駅制度がしかれる ○慶長17年（1612）、越ヶ谷に街道整備のため、大沢忠次郎基雄が派遣された ○寛永12年（1635）、参勤交代制がしかれる ○寛永13年（1636）、現・日光東照宮竣工～などを通じて整備されていったと思われます。

#### ◎その特徴は？

大きな特徴は越ヶ谷町と大沢町との合宿（あいじゅく）であったこと。最初、本陣は越ヶ谷の会田八右衛門家が世襲していましたが、大沢町の照光院が仮本陣であった時代を経て、大沢町の脇本陣だった大松屋福井家が本陣となりました。いつの間にか、越ヶ谷は商業のまち、大沢は旅籠のまちというようになってゆきました。



## 日光道中の紀行文などに記載されている江戸時代の「越谷名物」について

### ◎焼米とうなぎ

- 武奥増補行程記 清水秋全（盛岡藩主の求めにより描いた盛岡から江戸への道中絵図） 寛延4（1751）  
「蒲生縄手 名代屋き米」 「名物うなぎ蒲焼」（上間久里と下間久里の間に記載）
- 蝦夷蓋開日記 谷 元旦（谷 文兆の弟、蝦夷探検に出かける途中で） 寛政11（1799）  
「加茂村に至る。此辺焼米を名物とす。」 「その続き、真栗也。鰻の蒲焼、名物也。」
- 未曾有記 遠山景晋（遠山金四郎景元の父、蝦夷探検に出かける途中で） 寛政11（1799）  
「加茂、左、家統 やき米名物」 「まくり、休。名物の鰻魚あり。」
- 東遊奇勝 渋江長伯（蝦夷地採薬調査に出かけた奥詰医師） 寛政11（1799）  
「加茂 此所焼米の名代 家毎に焼米を売る」 「上マクリ 茶屋の後沼あり 鰻の名物」
- 東案内記 不明（蝦夷地見回りに出た幕吏が書いたか） 享和2（1802）  
「加茂村 家並に焼米あきのふ。」  
「マクリ村 此里家数少し有りて蒲焼の名物なり、乍去ちと高値なりし、」
- 越後新発田より会津を経て江戸へ至る道中絵図 遠藤奉慶（新発田藩士） 天保8（1837）  
「蒲生 此村焼米牛蒡名物」 「間久里 茶屋秋田屋七郎衛門ノ庭 御駕立 鰻名物」
- 奥羽道中膝栗毛 十返舎一九 弘化5（1848）  
「かも村にさしかかればここにしおせんべいの名物あり。いと大きくして一つ八もんづつ」  
「上蛤立場にいたれば此所うなぎの名物売店三四軒あり」
- 日光山道中日記 野口甚左衛門（草加の人） 元治1（1864）  
「蒲生村 焼米名物」 「まくり村うなぎ名物茶や多し」

### ◎焼米

- 結城使行 水野長福（結城藩・水野家の家臣） 元禄16（1703）  
「当処の名物とて やき米を道にひさぐこと 加茂村ではあり 蒲生なりといふもの」
- 日光道中膝栗毛 仮名垣魯文 安政4（1857）  
「越谷 名物鬼焼」（挿絵に記載）

### ◎うなぎ

- 日光巡拝図誌 今井 中（江戸在住の庶民） 文化15（1818）  
「下間久里・上間久里、此所にうなぎ店三軒程有り、名物なり。」
- 陸奥日記 央齋（江戸の文人、松前をたずねる途中で） 文政1（1818）  
「まく里といふ所に名物うなぎのかば焼有しかど～ 名物のうなぎは。うまく～」
- 全楽堂日録 渡邊華山 文政13（1830）  
「マクリという処に鰻をひさぐ家あり、これは小休とて、御駕もとどめて御供の人々を息するなり。～」
- 日本駅程見聞雑記 安長法眼（幕府のご典医） 天保14（1843）  
「上まくり このところうなぎの名物なり 売店三四軒あり」
- 増補新訂日光道中行程安見絵図 不明（道中絵図 須原屋伊八刊） 嘉永3（1850）  
「うなぎ沢と云 うなぎ なまづ名物」（上間久里の箇所に記載されている）
- 五街道細見記 不明（道中絵図 須原屋茂兵衛他刊） 寛政5（1858）  
「名物うなぎ屋」（上間久里と下間久里の間に記載されている）